

児童文学作家への道

——児童文学では喰えないというお嘆きのあなたに——

藤田のぼる

風景その1

一昨年から昨年にかけて、共時性ともいうか、書かれている事柄もしくはモチーフが、妙に重なるなど感じたいくつかの作品に出会った。今回のテーマにうまくつながるのかどうか心許ないが、そのことから始めたい。いくつかの作品というのは、出版順に言えば、斎藤惇夫『哲夫の夏休み』（岩波書店、10年10月）、角野榮子『ラストラン』（角川書店、11年1月）、斉藤洋『遠く不思議な夏』（偕成社、11年7月）、富安陽子『盆まねき』（偕成社、同）の四作である。

斎藤惇夫は一九七〇年に『グリックの冒険』でデビューし、二年後に『冒険者たち』、さらにその十年後の一九八二年に『ガンバとカワウソンの冒険』を出版して以降は、作家としては沈黙を守ってきた。従って、今回の作品は実に二十八年ぶりの四作目ということになる。そして、初めての「（動物たちではなく）人間の世界の物語」だった。

主人公の哲夫は小学校を卒業し、中学校への入学を控えた春休みに、父の故郷である新潟県の長岡に旅をする。当

初二人の予定だったが、出版社勤めの父親の都合で先一人で長岡に向かうことになる。旅程を組んだのは父親で、新幹線ではなく、哲夫の住む埼玉県浦和から在来線を乗り継いで向かうのである。

さて、大宮から信越線特急「あさま」に乗った哲夫だったが、父がいるはずだった隣席に、車掌に案内されてきた中年の女性が座る。そして哲夫が手にしていた『宮沢賢治全集八』に目を留めた隣の女性から話しかけてき、哲夫は自分のことや家族のことまで話す羽目になる。高崎で哲夫と一緒に上越線に乗り換えた彼女は、自分も長岡出身であり、本当は軽井沢に行く予定だったのだが、哲夫の話聞いて急に故郷に帰りたくなったのだという。つまりは、哲夫の一人旅は、この女性、実は父とは幼馴染の順子（なおこ）との二人旅となるのだ。

この作品は大枠でいえばタイムファンタジーということになるのだろうが、〈今〉↓〈別の時間〉↓〈今〉というふうにつきりと区別されるのではなく、両方の時間が互い